

随筆

「合馬の竹の子」

福岡市中央区医師会 佐野 正敏

二十数年前に両親が亡くなった後に兄(正博)が整理した過去帳や家系図等のコピーを貰った。一昨年に姉が他界した時にその家系図を見る機会があり、父(正人)が時折話していた祖父(貞蔵M17年～S34年)と「合馬の竹の子」の事を書き留めて置きたくなった。

実家は福岡県企救郡蒲生村(現:北九州市小倉南区)にある。貞蔵は同企救郡合馬村から嫁:原田ハル(M18年～S18年)を貰った。合馬村は山間の村で田畑も狭く貧村であった。竹林も多かったそうであるが「和竹」であった。佐野家は代々の百姓であったが、貞蔵は研究熱心な変わり種でいろいろな野菜栽培に挑戦し貞蔵の作った野菜は小倉の市場で高く売れた。貞蔵は嫁(ハル)の実家である合馬村を支援したいとそれら種々の野菜栽培を試みたが上手く行かず、最後に思い着いたのが筍であった。戦前に大陸に渡り種々の竹を探して「孟宗竹の中でも最も美味しい筍」を選び合馬村に植えた。企救郡の阿蘇火山灰からなる赤土がその孟宗竹に適していたようだと正人が言った。

その後、合馬は筍の一大産地となり昭和30年頃には初めての缶詰工場が出来た。当時は蒲生から合馬までの公共交通機関は無かった。毎年春になると合馬からトラックが迎えに来た。家族で荷台に乗り缶詰工場の前を通過して原田家に着き泊まりがけで筍料理をご馳走になった。

昭和30年代前半ごろに合馬の孟宗竹を実家蒲生の里山の南斜面(合馬と同じ赤土)に移植した。10年

ぐらい経つと我が家でも筍が掘れるようになった。味は同じで美味である。その頃中学生だった私の春休みの日課は父と一緒に竹林の掃除、日曜日や連休には2時間で50本前後の筍を掘った。掘った日は寝る毎に脇の裏に筍の穂先(トンボ)が浮かんでいた。医学部6年までは毎年筍を掘っていた。卒業後は減多に帰る機会がなかったが、新小倉病院に勤務した2春だけは掘る事が出来た。今でも春の竹林を歩くと筍のトンボを探してしまう。

父は産婦人科医であったが俳句に傾倒し、晩年は「ホトギス」の同人に推挙された。還暦と古希にそれぞれ「不老句文集1・2」を出版した。最近になって読み返したが「貞蔵と合馬の竹の子の由来」に関する文章は無かった。筍の10句ほどが残っていた。下記の二句を記して稿了とした。

- 藪医者の午後は筍掘る日課(不老)
- 土匂ひ筍匂ひ掘り上げし(不老)